

クマとの調和した暮らし

Living in Harmony with Bears



日本語版の発行に寄せて

この冊子のオリジナル”Living in Harmony with Bears”は、アラスカオーデュボーン協会が、アラスカにおける人とクマのよりよい関係を築くために作成したものです。北海道のヒグマや私たちの暮らしにはかならずしも当てはまらない項目があります。でも私たちは人とクマの関係の基本は、世界中どこに行っても同じであると考えます。人とクマとの関係を改善するためには、クマの生態や行動について理解することは非常に大切なのです。そして北海道に生息しているのがヒグマであるかぎり、その生態や行動の基本的な部分に変わりはありません。そういった意味で、この冊子から学ぶことは非常に多いと思います。是非北海道で私たちが置かれている状況に置き換えて読み進んでみてください。

共通していることが多いと書きましたが、北海道のヒグマに特徴的なことや、長い歴史の中で培われてきたことがあるのも事実です。より理解を深めるために、日本語版を作成するにあたって「北海道のヒグマ」という項目を追加しました。

この冊子を通じて、北海道における人とヒグマの関係がよりよいものになることを願って止みません。

この冊子の翻訳・制作は、北方圏フォーラムヒグマワーキンググループの普及活動の一環として行われました。

北方圏フォーラムヒグマワーキンググループ
釣賀一二三・間野 勉

2008年1月25日

クマとの調和した暮らし

「クマとの調和した暮らし」はアラスカオーデュボーン協会がすすめているプロジェクトです。このプロジェクトは、ヒグマやクロクマ（アメリカクロクマ）そしてホッキョクグマと人との共存を支援するために計画されました。



この冊子の発行に協力して下さったのは、アラスカオーデュボーン協会、アラスカ保全基金、

アラスカ・ウォッチャブル野生生物保護トラスト、ネイチャー・コンサーバンシー、コディアックヒグマトラスト、アラスカ州漁業狩猟局、キーナイ国立野生生物保護区、国立公園局、合衆国森林局、プラット博物館とリチャード・ローダ・ゴールドマン基金です。

アラスカオーデュボーン協会は、アラスカ州漁業狩猟局、合衆国魚類野生生物局、国立公園局、合衆国森林局、合衆国地理調査所生物資源部門およびネイチャー・コンサーバンシーに所属する生物学者の皆様の、本プロジェクトに対する協力に、心からお礼を申し上げます。J. コーディー、J. ヘッテル、T. ポール、R. シノット、そしてL. ヴァンデルの諸氏には、地域の概要について原稿を作成していただきました。

ここで取り上げるクマたちにはそれぞれ個性があり、行動が予想できない個体もいます。クマと関わる際には、必ず何かしらのリスクが伴います。この小冊子の目的は、そのリスクを少しでも少なくすることです。



人とクマ	1
クマとの係わり、その歴史の概要	2
クマに関する基本的な知識	3
クマの一年	5
クマの行動	7
クマ同士のコミュニケーション	9
クマの王国での安全対策	11
クマによる襲撃	14
狩猟者のための安全の秘訣	15
クマと食べ物	17
観察可能なクマ	21
クマの保護管理計画とその実行	23
キーナイのクマ	25
コディアックのクマ	27
アンカレッジのクマ	28
アラスカ南西部のクマ	29
アラスカ内陸部のクマ	30
アラスカ北部および西部のクマ	31
アラスカ南東部のクマ	33
北海道のクマ	34

人とクマ

増大する人口と資源開発、観光、レクリエーションといった活動に伴い、アラスカの人々はヒグマやクロクマと生息地をどのように共有するかという難問に直面しています。

人の活動はクマに影響を及ぼします

わたしたちの生活にともなう活動は多方面にわたり、いろいろな面からクマに影響を及ぼしますが、そのことに気づくにはたいてい時間がかかります。現在アラスカの多くの地域では、ヒグマ、クロクマ、そしてホッキョクグマが安定して生息していますが、一部の地域ではこの状態がすぐに崩れてしまう可能性があります。

私たちは、あつれきを最小限に抑えることができます

住居の所有者、狩猟者、行楽客や、クマを気にかける全ての人々が、この素晴らしい動物の生息地と彼らが生きていく上で必要なものに対して注意を払うことで、あつれきを最小限に抑えることができます。

アラスカではクマよりも人の数が多い

クマは数えるのが難しい動物です。アラスカ州とそれに隣接した海氷には約 4,000 ~ 7,000 頭のホッキョクグマ、35,000 頭のヒグマ、そして 100,000 頭以上のクロクマがいると推測されています。一方、人は少なくとも 600,000 人が住んでいます。

アラスカの人々はクマを必要としています

アラスカの人々は恵まれています。彼らは、クマをアラスカに残しておきたいと考えています。意識調査では、住民、観光客ともに、クマを再生可能な資源として、また観察することで楽しめる動物として評価していることが明らかになりました。



クマとの係わり、その歴史の概要

クマと人との係わり方は時代と共に変わっています。つい最近になって、やっと私たちは肉食動物を保護しなければならないことに気づいたのです。



私たちは何千年もの時を共にしてきました

クマと人は、アラスカで何千年もの時を共に生きてきました。その間、同じ動物を狩り、同じ川で魚を捕り、同じ道を歩いてきました。

古代の文化的慣習にはクマに対する畏敬の念がありました

クマは、アラスカ先住民達の生活の中で大切な部分を占めてきました。そしてそれは今も変わりません。文化的慣習にはクマに対する畏敬の念がみられ、クマの遺骸を埋める儀式、また擬人化した行動をとるクマの話などがあります。先住民のクマに対する見識や信仰は、私たちの豊かな遺産の一部なのです。先住民たちが行った猟やその生活習慣は、限られた例を除いて、クマ全体に対してほとんど影響を及ぼしていません。

入植者はクマを競争相手として扱いました

アラスカに来た開拓者たちは、クマに対してほんのわずかな尊敬の念しか抱きませんでした。彼らは、クマを利用の対象として、あるいは根絶させるべき競争相手としてしか扱わなかったのです。サケが上ってくる川の近くに家を建て、クマが来なくなるまでずっと撃ち殺すのが普通でした。この無益な消費と無秩序な狩猟行為が、後に野生生物保護区や狩猟制度の創設へとつながっていったのです。

現在、ヒグマはその狩猟獣としての価値のために殺されています

多数のクロクマが、また時としてヒグマが、食べ物として捕獲されています。そして時には、両種とも人の生命や財産を脅かすものとして殺されています。アラスカ州のほとんどの地域においては、狩猟者が捕獲することによってクマの減少してしまうことはありません。この理由として、規制によって子連れのメスが保護されていることがあげられます。

ヒグマウォッチングは人気上昇中

過去 20 年ほどで、クマを観察することの人气がとて高くなりました。クマの観察事業の成功を通じて、クマの観察にはとても価値があることに気づいたのです。

クマに関する基本的な知識

アラスカはクマの王国です。

私たちはどこでもクマと遭遇する可能性があります

ヒグマはどこにでもいます。人が少なくて質の高い生息環境、そしてサケが多いところにクマは最も多く生息しています。これらの条件に当てはまるのが、コディアック島、アラスカ半島、そして南東アラスカの北部の島々です。

クロクマは、木々が生い茂った場所に生息しており、このような場所はアラスカ州の4分の3を占めています。コディアック島とアラスカ半島の大半の地域には、クロクマは生息しません。ブルック山脈より北や、ユーコン・クスコックウィム三角州、ソード半島ではわずかにしかいません。そしてアラスカ南東部では、本土とアドミラルティー、パラノフ、チチャゴフおよびクルゾフを除く島嶼で普通に見ることができます。

ホッキョクグマは、アラスカとポーフォート海のカナダ国境からチュクチ海を通過してソード半島とベーリング海に至る、積氷地帯南端の北極圏沿岸に分布しています。

様々な毛色のクロクマやヒグマがいます

アラスカにいる多くのクロクマは黒色ですが、茶色のものや南東アラスカのグレイシャー・ベアのように青灰色のものもいます。茶色いクロクマはアンカレッジ近くでみられ、キーナイ半島にはいません。

ヒグマの毛色も金色からこげ茶色、黒まで様々です。オスのヒグマは、たいていメスに比べて色が濃いようです。

ヒグマとクロクマ、ホッキョクグマは外見上異なります

ヒグマには、肩の間にはっきりしたコブがあります。クロクマは真っ直ぐな、あるいはローマ人風の横顔をしています。それに対してヒグマはわずかにくぼんだ、あるいはお皿のような形の横顔をしています。ヒグマの吻の部分は毛皮と同じ色をしていますが、クロクマの場合、たいてい黄褐色か茶色い模様が入っています。

クロクマは木に登るので、短くて湾曲した爪を持っています。ヒグマの爪はクロクマと比べて2倍ほど長く、また真っ直ぐです。クマを足跡で区別するのはとても難しいことですが、クロクマのつま先がやや弧を描くのにたいして、ヒグマの場合は直線的であることを知っているといいでしょう。ヒグマの場合それぞれの指の跡が、ほぼくっついているのに対して、クロクマは離れているのも特徴です。



ヒグマは大きい

ヒグマには様々な大きさや体型のものがいます。生まれた年に冬眠穴から出てきたばかりの子グマは15ポンド(約6.8kg)であるのに対して、夏の間にはサケをたっぷり食べて太ったオスの成獣は半トン以上にもなります。成獣は、夏から秋にかけて体重の30~40パーセントを増加させるので、一日で何ポンドも増えることがあります。

真夏にメスの成獣は250~600ポンド(113kg~272kg)になります。オスの成獣は600ポンド(272kg)から優に1,000(450kg)ポンドを越えるものまで様々です。春にアラスカ半島で麻酔をしたオスは、1,275ポンド(578kg)もありました。コディアック島では、ほとんど1,500ポンド(680kg)の記録があります。

アラスカでは内陸部には例外的に大きいものもありますが、北へ行けば行くほどヒグマは小さくなる傾向があります。体の大きさには、クマがどんなものをどれくらいの期間食べてきたかといったことが関係しています。沿岸部とコディアック島のヒグマが巨大なのは、夏から秋にかけてサケを食べることができるからです。

たいてい、オスのヒグマは同世代のメスのヒグマより大きく、肩の高さが5フィート(152.4cm)立つと9フィート(274.3cm)にもなることがあります。オスはメスより頭部の幅が広く太い首をしています。頭や首には、他のオスとの戦いや、時には怒ったメスによって受けた、たくさんの傷がついています。

クロクマはヒグマより小さい

ヒグマと同様に、クロクマも季節によって体重が変動します。大きいクロクマは、小さいヒグマよりも大きくなる場合があります。アラスカでは普通、メス成獣の体重は100~250ポンド(45~113kg)で、オスは200~400ポンド(91~181kg)以上あります。アラスカ州で最も大きいクロクマは、南東部で見られます。

ホッキョクグマは海の哺乳類

ホッキョクグマはヒグマに近い種ですが、海氷での生活に適応しています。彼らは大型で白い毛皮を持っています。非常に大きなオスの成獣は、体重1,500ポンド(680kg)ですが、多くは600~1,200ポンド(272~544kg)の範囲です。メス成獣の体重は400~700ポンド(181~318kg)です。冬を通して食べ物(海氷域で生活するアザラシ)が豊富なので、妊娠したメスだけが冬眠穴を作ります。冬眠穴は、海氷の上にも北極海沿岸の陸地にも掘ります。

クマは長生き

クマがどれほど長く生きるのか誰も知りません。毎年20歳台のクマが殺されています。何年か前にコディアックで殺されたクマは、34年前に耳標識をつけ、唇に刺青をされたものでした。

クマの一年

クマとのあつれきを最小限にする一つの方法は、クマを避けることです。クマは食べ物のある場所やクマ社会で受ける圧力によって季節ごとに移動するので、クマのいる場所を知っておくことは理にかなっています。



クマは広範囲を利用します

ヒグマの行動範囲は数平方マイルから数百平方マイルまで様々です（1マイルは約1.61km）。

春は重要な時期です

クマは通常4月から5月に冬眠穴から出てきます。たいてい年取ったクマが最初に、その年生まれた子グマを連れた母グマが最後に出てきます。大半のクマ、特に子連れのクマは、穴から出てきて一週間かそれ以上の間、冬眠穴の近くにいます。この間が重要な時期です。食べ物が少なく、他のクマに捕食される可能性もあるのです。

クマは自分の食べ物を守ります

春、弱っているヘラジカやトナカイは、クマにとって簡単に手に入る獲物となります。生まれたばかりの子どもや冬の間死んだ動物の死骸などは、更に重要な食べ物なのです。クマは手に入れた死骸や殺した獲物をワタリガラス、ワシ、クズリ、オオカミ、そして他のクマから守ります。このときの彼らはとても攻撃的で、あえて近くにやってきた人に向かって突進することもあります。クマが食事を邪魔されるといったことは、いつの時期でも起こるものですが、春は特に気をつけなければなりません。

交尾期は交尾相手を探してさまよっているため、クマはどこにでもいます

たいていの場合、交尾の季節は5月中旬から6月の終わりまでですが、7月中も続くことがあります。オスの成獣は、交尾できるメスを探して自分の行動範囲を動き回ります。発情期に入ったメスのヒグマは、子グマを連れたメスよりも長い距離を移動します。こうすることで、オスグマと出会う可能性が高くなります。ハイカーの人々は、春にはクマが高い山の峡谷から海岸線に至るまであちこちを動き回り、どこにいてもおかしくないことを知っていなければなりません。

2頭目のクマに気をつけて！

メスのヒグマは、短い期間に複数のオスと交尾することがあります。この時期のクマはそれほど攻撃的ではありませんが、年を取ったオスグマが好意を持ったメスグマを追跡しているときは、そのことに夢中になっているので、思いがけず近くに来ることがあります。もし、5月か6月にメスグマが道を歩いているのを見たら、近くにいるかもしれないオスグマに注意してください。

若いクマは時々人の生活圏に入ってきます

メスグマが発情期に入ると、自分の子供に対して寛容ではなくなります。母グマは頻繁にオスグマを引き寄せるようになり、このことは子グマにとって間違いなく恐怖となります。乳離れさせようとしている母グマは、実際に子グマを噛んだり追いかけたりします。乳離れした子グマはお腹を空かしていませんし、自分のクマ社会における地位について学び始めたところです。これらの「解放された」、自立したばかりの2、3才のクマは、彼らより優位なクマとの競争がない場所を探して頻繁に人の生活圏に現れます。

夏：食欲の季節

短いアラスカの夏にクマを探すなら、彼らの好む食べ物がある場所に行くべきです。交尾の時期が終わるにつれ、植物は熟し、サケが手に入るようになり、クマは限られた場所にとどまるようになります。冬から春のはじめにかけて体重を減らしてきたクマにとって、夏は急激に体重を増やし始める時期です。クマは12時間かそれ以上食べ続け、短い仮眠をとって再び食事に戻ることもあります。

寝ているクマはほっておきましょう

とても大きいオスは自分の好きなところで休みますが、それはたいていの場合餌場から近く、クマの

通り道からそう遠くないところです。サケがそ上する川の近くの茂みは、お気に入りの場所です。メスは、餌場に近くて隠れることができる場所で休みますが、大きいオスを避けるために遠くに移動しがちです。調査の結果から、キーナイ半島のメスヒグマは、サケがそ上する川から2マイルも離れた場所で休憩することがわかりました。

通常、休んでいるオスのヒグマは、他のオスに出くわさない限り何も気にかけません。もしクマ同士が遭遇した場合には、休憩中のクマは防衛的に振る舞い、頻繁に唸りあったりして威嚇(時には数回噛みつく)します。休んでいるクマにうっかり出会ってしまった人は、とても怖い経験をするかもしれません。

単独のメス、子グマと一緒にメス、そして若い成獣の全てが、オスの成獣を避けます。したがって、これらのクマは、視界が良くて大きいオスグマがいないような場所を好みます。川の上流の稜線や、干潟、砂州や砂浜、さらに崖の斜面ですら良い休憩場所になります。



秋、クマは食べ物がある場所の間を行き来します

秋も、クマは引き続き栄養価の高い食べ物があるところに行きます。あなたが、いつベリー類の実が熟すか知っていたら、クマもそれを知っているので出会えるかもしれません。でも、サケと熟したベリー類の両方がある場合は、片方の食べ物がある場所から別の場所へ行き来することを予測しましょう。

狩猟期には、何頭かのクマが、キャンプのゴミ、狩猟者が撃った獲物や「残滓(ざんし=肉や皮を取ったあとの内蔵や骨などの残骸)置き場」といった、彼らが食べ物をあさることを覚えた場所に引き寄せられるかもしれません。

晩秋、気温が下がってサケがいなくなり植物が休眠状態に入る頃、クマは冬眠する場所へ移動します。

クマと人との係わり合いは冬にも起こることがあります

冬の食べ物が少ない時期、クマはエネルギーを節約するために冬眠します。通常クマは4~7ヶ月の間冬眠穴の中にいます。ヒグマは冬眠中でも攻撃的になるかもしれません。なぜなら、他のクマに襲われる可能性があるため、眠りを浅くしていつでも侵入者に対応できるようにしているからです。この時期に人とのあつれきが起こることは滅多にありませんが、時に起きることがあります。

クマは隔離された場所を好みますが、冬眠穴はどこにでもある可能性があります。ほとんどの冬眠穴は、水はけが良く冬の間中凍っている場所に掘られています。ヒグマは冬眠穴を作る際に、とてつもない量の土砂をかきだすことができます。ヒグマは、最大長さ6フィート(183cm)高さ3フィート(91cm)の穴を掘ることがあります。

クマは冬眠中に子どもを産みます。子グマは1月か2月に生まれます。ヒグマもクロクマも2~3頭の子グマを産みますが、4頭が確認されたこともあります。ヒグマの子供は、その後2度の冬を母親と共に冬眠しますが、クロクマの場合は一度だけです。時として、子グマはさらにもう1年、母親と一緒に過ごすことがあります。

クマの行動

クマが人に出会った場合、たいていは他のクマに会ったときと同じような行動をとります。このときの行動を知っておくことが、不要なあつれきを避けるのに最もよい方法でしょう。

クマの行動は予測できます

クマの行動は予測することができます。このことは、人がクマと遭遇してしまった際に役立てることができます。

クマは化け物ではありません

クマに悪意はありません。とても稀な場合を除いて、積極的に人を襲うことはないのです。彼らは、餌場に近い場所に人がいるときには我慢してそこにいますが、基本的には人を避けることを選びます。

クロクマとヒグマは生き残りのために別々の戦略を発展させました

環境への適応力が、クロクマとヒグマ、それぞれの人との関係と人に対する反応を形作りました。

クロクマは木登りがとても上手です。クロクマが脅かされたとき、その原因となったものから走って逃げるか、木の上へ移動します。子連れの場合、子グマが危険から逃れることができれば、母グマは怪我をするかもしれないような激しい防御をしなくてもよくなります。クロクマは人から逃げようとする傾向が強いのですが、それでも彼らは人に怪我を負わせることができる力を持った動物です。

ヒグマは海岸沿いの森林に生息していますが、木がない場所も利用するようになりました。彼らは脅かされたときに、クロクマよりも自分を守るようとする傾向が強い動物です。ヒグマの防御するときの最初の手段は退却ですが、脅威であると感じた他のクマや人に対して、とても攻撃的になることもあります。

クマにはとても社会的な面があります

クマはオオカミやチンパンジー、ライオンと比べたとき、よく社会的な動物ではないといわれます。比較するときにはこれは正しいかもしれませんが、クマを非社会的と形容するのは間違いです。クマが集団で獲物を狩ることはありませんが、彼らはお互いにとても近い場所で共に生活することができます。このような地域のクマはたいていお互いが顔なじみで、出会ったときにはさまざまな情報交換を行います。

クマは縄張りを持っていません

縄張りを持つということは、同じ種の動物を一定の地域に近づけないことを意味します。オオカミや類人猿は縄張りを持っていますが、クマはそうではありません。クマは人と同じように行動範囲を共有しています。このような土地と資源の共有が、クマの社会的行動の基本となっています。

クマは順位制の中で生きています

成熟した成獣のオスが順位のトップに君臨し、若い成獣と子グマは最も下位にいます。クマは、攻撃的に行動することで自分の地位を獲得し、維持します。

単独のメスグマや子連れのクマは、たいていオスの成獣に対して従順ですが、彼らのグループ内における順位制は厳格なものではありません。この順位は年齢や大きさ、あるクマは他のクマより攻撃的である、といった気性で決まります。

クマは自分の空間を守ります

クマは人や他の動物と同じように、自分の空間（クリティカルスペース）を持っています。ひとたび

クマのクリティカルスペースに入ってしまったら、あなたは、クマに逃げるか、それとも戦うかの判断を迫ったことになります。クリティカルスペースの大きさは、それぞれのクマとそのときの状況によって異なります。

クマは分け合いません

クマは食べ物を分け合いません。母グマは子グマに餌を与えませんし、子グマはそれに耐えなければなりません。母グマは魚やヘラジカの子供を仕留めると、それをすぐに食べ始めます。子グマは、兄弟や母親と争って自分の取り分を確保します。手に入れたものがすぐに食べられるようなものではない場合（例えば、ヘラジカの足や魚の頭）彼らはその一切れをかたくなに守ります。一部のクマが人と遭遇したとき、特に食事を邪魔された場合に攻撃的な防御反応を見せることは、このような行動から説明することができます。

クマは他のクマに慣れるのと同じように人に慣れます

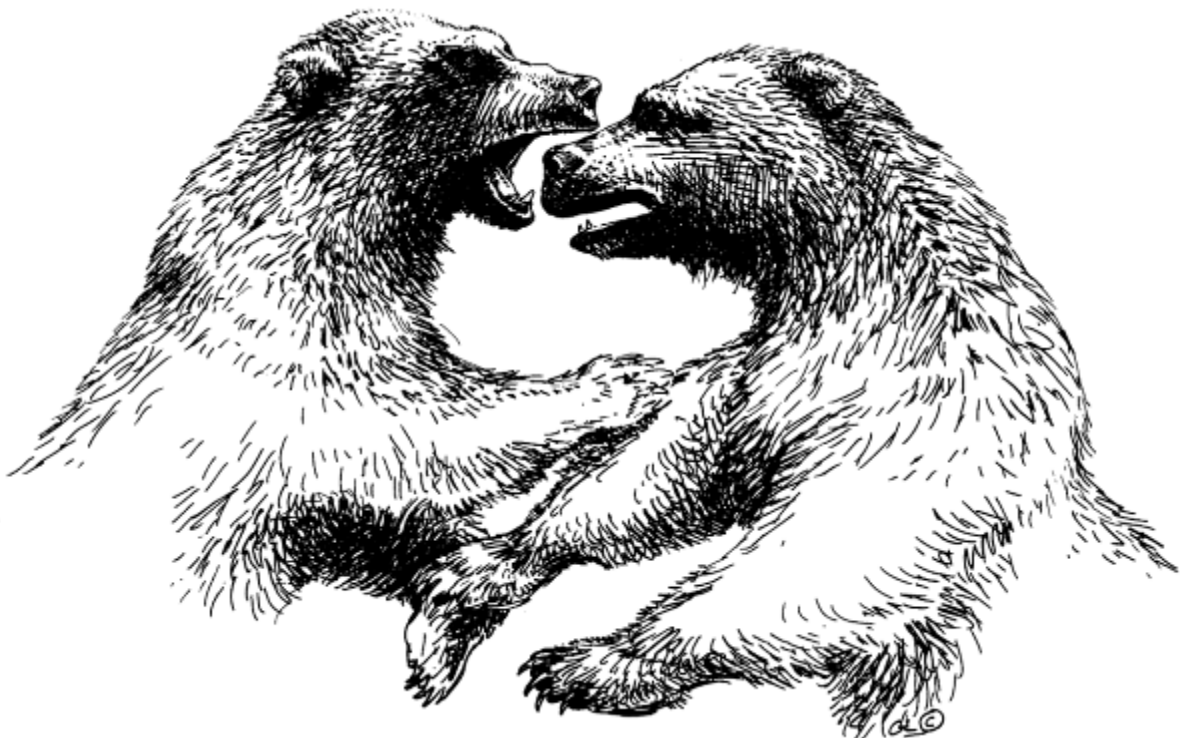
川にあがるサケや山腹のベリー類など、食物資源が限られた場所に大量に固まってあるため、クマは近距離にいてもお互いに寛容にふるまうように行動を進化させました。このような行動は、人との関係にもあてはまります。銃で撃たれたり嫌がらせを受けたりしなければ、クマは他のクマに対するのと同じように人に慣れてしまいます。

クマは自分たちの環境の中で新しいものに反応します

新しい物や状況は、クマを怖がらせることがよくあります。行動学者はこれを「異物反応」と呼びます。最初に恐怖を感じた後に、たいていのクマは彼らを怖がらせたものを詳しく調べようとします。これは、攻撃的な行動ではないので、そのように解釈されるべきではありません。

クマがいつも気づくとは限りません

クマ、特に成獣のヒグマは、自分の周囲の状況をいつも把握しているとは限りません。彼らは食物連鎖の頂点にいて、心配ごとはずかにはかないのです。道に行く大きいクマは、いつも前を見ているとは限りません。クマは、思いがけず人にぶつかってしまうことが本当にあるのです。



クマのコミュニケーション

クマの言葉を理解することは役に立ちます。

クマは人間とは違った方法でコミュニケーションします

クマは視覚、触覚、声や嗅覚を使ってコミュニケーションをします。このようなコミュニケーションは、母グマと子グマが一緒にいるときに役立ったり、社会的緊張を緩めたり、あるいは他のクマと近い距離で食事することを可能にしています。

クマは互いを威嚇します

クマは大きくて強く、互いに傷つけることができる動物です。彼らが行うコミュニケーションはこのことを反映していて、実際に戦う代わりに威嚇やディスプレイを頻繁に行います。クマは時々これと同じ行動を、私たち人とのコミュニケーションにも使います。

視覚信号には意味があります

クマが使ういくつかの視覚信号は、犬科(オオカミ、イヌ、コヨーテ)の動物が使うものとよく似ています。攻撃的ディスプレイに使われる信号で最も一般的なのは、体の動作です。歩く、走る、座る、そして横になるといった行動は、何らかの意味をもっています。クマが、別のクマよりも自分の地位が低いことを認めていることを現したいときは、単純に別の場所へ行くか、座ったり、横になったりします。そのような行動をとるクマは、優劣、魚を捕る場所、あるいは発情期のメスグマを争って戦う意志がない、ということを示しています。反対に、クマは自分が優位であることを、歩いたり走ったりして近づくことで伝えます。

クマは、体の動作と同じくらい頭と口の動きも使います。敵の周りを頭を高くして回った後、更に攻撃的になると、頭を低くして口を開け、そして短く突進するといった一連の動作を始めます。

接触しようとしているクマは耳を頭にぴったりと付けているかもしれません。これはクマの意思を表していますが、同時に耳を噛まれることを防いでいるのです。接近してくるクマは、たいてい耳を前に起こしています。おそらく、何か手がかりを聞き取るためだと考えられています。

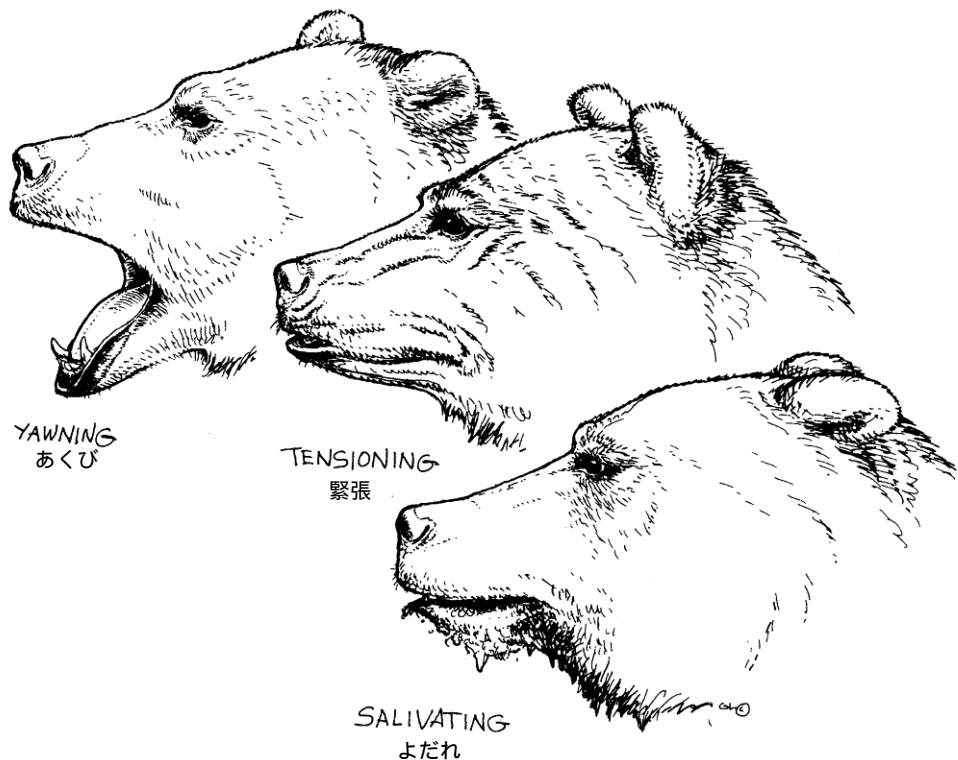
後ろ足で立っているクマは攻撃的な行動をとっているわけではありません

一般的に言われていることとは反対に、立ち上がっているクマは威嚇しているわけではありません。クマが後ろ足で立っているときは、興味を持ったものをもっとよく見たり、匂いをかいだりしようとしているだけなのです。クマは、少なくとも人と同じくらいの視力を持っています。

クマはたくさんの種類の声を出します



クマは素晴らしい聴覚を持っており、様々なポーズをとるときには、はっきりと識別できる声を出します。多くの場合クマのコミュニケーションは、クマ同士が近い距離にいるときに行われます。ただし、子グマが母親と離れてしまったときには叫び声をあげます。クロクマは、低いうなり声を出したり、不安なときには鼻をかむような音を出したりします。社会的地位が近いヒグマ同士では、相手が近くにいるときのコミュニケーションに、低い鳴き声を使います。声の役割はひとつだけとは限りません。興奮したメスのヒグマは、空気を口に運び入れ、歯を鳴らし、頬を動かして、カプカプというはじけた音を出します。この「はじけ音」を出すとき、彼女は匂いを嗅ぎ取り、自分が興奮していることを周囲に知らせ、子グマに注意を呼びかけます。



クマは、ヒグマに比べてよく声を出すようです。これは、視界の悪い森林の生息環境に適応した結果かもしれません。

多くのクマが人に対して発する声は、ストレスを受けたときに出す、威嚇を表すものです。ヒグマの突進やクマが地面を叩くと同様に、声を出すことは物理的な接触を避けてその場をやり過ごすのに役立ちます。

クマは遊びや触ることでコミュニケーションをとります

クマは、お互いに攻撃的な態度をとることがありますが、その一方で平和的で威嚇を伴わないコミュニケーションも行います。これは非常に重要なことで、その一つに「遊び」があります。2匹のクマによるレスリングは、怪我をするかもしれないような取っ組み合いの中にたくさんの行動やポーズを含んでいますが、実戦とは動機と激しさが違います。

母グマと子グマとのつながりは、遊びや触れあい、授乳を通して着実に強くなっていきます。兄弟は、いつも互いに触ったり遊んだりします。社会的地位の近いヒグマは、お互いに擦り合い、匂いを嗅ぎ合うといった念入りな挨拶を交わします。繁殖期のオスとメスも、これと同じように挨拶を交わします。

匂いによるコミュニケーションも役割をはたします

クマは素晴らしい嗅覚を持っていて、それをコミュニケーションの手段として使います。クマは尿や糞、そして足跡の匂いを嗅ぎますし、お気に入りの背擦り場所（木や藪に体を擦り付けたり、噛んだりして匂いが残っているような場所）があります。

コミュニケーションの際、クマはよだれをたらしたりあくびをしたりします

攻撃的な接触の際、クマはよくよだれを垂らします。これは、興奮していることを表すと考えられます。また、時々クマは社会的な交流の最中やその後にあくびをします。これもいっくらか興奮していることを表しているようです。

クマの王国での安全対策

私たちの意に反して、時として望まないクマとの遭遇が起こります。

準備しておきましょう

好奇心が強くて頭がよく危険性を秘めたこの動物と、奥地で、あるいは生活している場所の近くで出会ったとき、どんな対応をすればよいか、あらかじめ考えておきましょう。



クマが予測できる行動をとりましょう

アラスカにいる多くのクマは、人と関わった経験を持っています。私たちの人口が増えるにつれ、この回数も増えるでしょう。一回の遭遇によってクマが学習することは、その次に遭遇したときの行動に影響します。クマとあなた自身のために、一回一回の遭遇を良いものにするようにしましょう。もし、私たちにとって危険ではなく予測できるように行動して欲しい、とクマに望むなら、私たちもクマにとってそうであるように行動することが大事です。

注意しましょう

クマは驚かされるのが苦手です。もし視界が悪いところでハイキングをするのなら、話しをしたり、手を叩いたりして自分の存在を知らせてください。あなたが狩猟を行っているのなら、あなたはとても静かに歩いていることでしょう。その場合は、ゆっくり動いて特に周囲の状況に敏感になってください。

グループで移動しましょう

これは常に現実的というわけではありませんが、グループが大きければ大きいほど襲われるリスクは低くなります。人の集団はクマを威圧することができるようです。クマは、大きなグループよりも1人や2人である人に近づきやすいのです。歩道上に散らばるのは、一人のグループをたくさん作っているのと同じですから、お互いに近づいて移動するようにしてください。

クマに近づいてはいけません

クマに向かって近づくこと彼らにとっては攻撃的な行動ですから、クマは嫌でも反応せざるを得なくなります。もし偶然クマに近づいてしまったとき、幸運にもクマがまだあなたの存在に気づいていないようなら、ゆっくりとその場を離れましょう。そしてクマがついてこないか注意深く観察しましょう。

クマは様々な理由であなたに近づいてくるかもしれません

クマがあなたに近づいてくる場合、そのクマは人に慣れていて、ただ自分の安心できる距離をとって歩いているだけかもしれません。あなたに興味を持っているのかもしれません。あなたが、クマが歩く道の上にいるのかもしれません。あなたがクマの防御空間にいて、クマは不安なのかもしれません。あなたの持っている食べ物が欲しいのかもしれません。メスのクマは、あなたを自分の子供に対する脅威だと思ったのかもしれません。クマは、あなたに対して優位に立ちたいと思っているか、とても稀なケースでは獲物になるかどうかを詳しく調べたいのかもしれません。

クマとアイコンタクトを取ることは、クマと遭遇したときの結果にはあまり影響しません

あなた自身がクマの行動を予測する手がかりを見つけるチャンスを得るために、クマを視界の中にとどめておくことは重要です。

落ち着いて下さい

もし、クマがあなたに近づいてきても落ち着いていてください。クマは、あなたに近づくと同時に、状況を判断しています。あなたが与える手がかりを、即座に集めているのです。もしあなたが興奮したら、クマも興奮しかねません。クマは、最初は興味を持っていただけでも、あなたの様子によっては怯えた状態に変わるかもしれません。子グマと一緒にいる母グマは、防御しながらあなたを遠ざけている状態から、とても緊張して攻撃的になり、威嚇を伴った攻撃をしてくるかもしれないのです。

自分が人間であることを示し、走ってはいけません

もしクマの緊張が高まり攻撃的になったら、低い声で話しかけましょう。**走ってはいけません**。クマは太っているものでも時速 35 マイル (56km) で走ることができるのです。



距離を取りましょう

クマは、互いに距離を取るによって敵対的な遭遇を避けています。もし、クマがあなたに向かって来ないなら、注意深く離れてみましょう。もし、あなたが動いたことによってクマが向かって来るなら、立ち止まってその場でじっとしていきましょう。あなたが、このように振る舞うことで、クマに、ボディランゲージで「自分にかまうな」と伝えることとなります。

クマはかなり近くまで来るかもしれません

クマは脅威にさらされると、まず近くまで寄ってきて、それから何をするか決めることがあります。もし私たちが、「自分が何者であるかを明らかにし、しっかりとその場に足を据え、クマに空間的な余

裕を与える」といったように正しく振舞えば、クマは正しい判断を下して、(時にそれは私たちが望む程早くはないかもしれませんが)立ち去ってくれるでしょう。

もしクマが執拗なら・・・

もし、クマが執拗にあなたに向かってくるなら、しっかりとその場に立ち続けましょう。そのクマはあなた自身か、あなたが持っているものに興味があって、あなたの体に危害を与えるかもしれません。叫んだり腕や何か適当なものを振ったりして、あなたはクマを恐れていないという意思表示をしましょう。グループでいる場合、肩と肩を並べてより大きい存在に見せるようにしましょう。

あなたが正しい反応をすれば、ほとんどの突進は直前で停止します

頭を低くし口を開けて突進する行動は、クマの切り札です。これは、脅威であると判断したもののへの防衛反応なのです。その場合、クマは自分がとても緊張していて、あなたが間違った場所にいるということ伝えてくれています。突進はあまりにも早く起こるので、対応する時間がほとんどありません。この突進は、ほとんどの場合接触する直前で止まります。

もしクマが攻撃してきたら・・・

もし、そして本当にもし、クマが襲いかかって来た場合、地面に腹ばいになって、顔と首をガードしてください。もしクマがあなたをひっくり返しても、また同じ姿勢に戻ろうとしてください。クマは、ほぼ確実に防御のために攻撃をしているのであって、脅威が解消されたと思った時点で攻撃は止むはず。クマが攻撃を止めたときは、できる限り動かないで静かにしていきましょう。クマがその場を去ったと確信するまで、そのままいきましょう。動いたり音をたてたりすることは新たな攻撃を誘発しかねません。もし、防御姿勢に入ってから暫くたっても攻撃が続き、クマが噛み続けている場合、それは、恐らく狩りとしての攻撃でしょう。全力で激しく反撃しなければなりません。

もし、クマがクロクマだとはっきり分かるならば・・・

地面に伏せてはいけません。あなたの命がかかっていると考えて反撃すべきです(実際この時点ではその可能性があります)。あなたはほぼ確実に捕食のための攻撃にさらされており、クマはあなたを殺そうとしています。攻撃を、なるべくクマの目と鼻に集中しましょう。

どちらの種のクマでも、テントの中へ襲ってきたら・・・反撃しなさい!

クマよけ

トウガラシスプレーは合法的な道具です。でも、間違った情報によって人々に誤った安心感をもたらすことがあります。様々な状況において、トウガラシスプレーの効果ははっきりしていません。スプレーは、クマに対する常識や予防策を身につけていることの代わりにはならないのです。もしあなたが、野外に出るときにトウガラシスプレーを持って行くなら、スプレーの限界(できることとできないこと)と使い方を覚えておきましょう。もし、使い方を間違えば、使用した人が動けなくなってしまうかもしれません。ある状況では、トウガラシスプレーが誘引物になってしまうことも知られています。実際に、クマは付着したスプレーの成分を舐めたりその上で転がったりすることがあるのです。トウガラシスプレーは、近距離でクマに向かって噴射するように設計されているものであって、テントや、水上飛行機のフロート、船、あるいはキャビンなど、クマがやってきたり噛んだりして欲しくないものに噴射しておく忌避剤ではありません。

クマによる襲撃

クマは時には人を傷つけます。そのような不幸な遭遇は、アラスカにクマがいる限りなくなることはないでしょう。一番の予防策は教育なのです。

一般的にクマの襲撃は、わずかの警告があるいは前触れもなく始まり、一瞬のうちに完了し、クマが立ち去って終わります

驚き、子グマや手に入れた餌の防衛、支配、捕食など、クマによる襲撃が起こる理由は数え切れないほどたくさんあります。たいていの被害者は、なぜ攻撃されたのか全く検討がつかず、子グマのいたことが確認された場合を除けばクマの性別すら分かりません。



襲撃の頻度はどれくらい？

アラスカでは、1980～1999 の間にヒグマによって 13 人が殺され、75 人が怪我を負いました。同じ期間にクロクマによって 2 人が殺され、3 人が怪我を負いました*。

毎年、クマは人の生命や財産を守るために捕殺されています

アラスカでは、人の生命や財産を守る（DLP）ためにクマを殺すことが、法律で認められています。1985～1996 年の間に、1,000 頭以上のクロクマとヒグマが生命と財産を守るために殺されました。法律には、動物への嫌がらせや挑発、不適切にクマの生息地へ侵入したためにクマを殺すことは違法であると、はっきり記されています。ゴミの間違った捨て方をしたり、他の誘引物を遺棄したりしたためにクマを殺すことも違法です。生命や財産を守るための全ての手段を使い切ってしまったときにだけ、合法的にクマを殺すことが出来ます。もし、クマが殺されてしまった場合は、そのクマは州の所有物となります。クマを殺したとき、頭蓋骨と爪がついた毛皮をアラスカ州漁業狩猟局に提出し、15 日以内に報告書を完成させなければなりません。

都市部では DLP による死亡数がクマの生息数に影響します

毎年、州全域で DLP 目的によって死亡するクマの数は、人によって殺される数のうちわずかでしかありません。死亡が報告されたクロクマの 3.1%、そしてヒグマの 5.2% が DLP 目的による死亡として記録されています。しかし、キーナイ半島、アンカレッジ、そしてマタヌスカ渓谷などの地域では、捕殺したクロクマの 6% とヒグマの 22% が DLP 目的によるものに分類されています。

クマによる襲撃が起こると、DLP 目的の捕殺は増加します

クマの襲撃がメディアで報道されると、DLP 目的による死亡の割合が劇的に増えます。

DLP 目的で殺されるクマの数は増加しています

もし、私たちが将来も健全な状態でクマを維持していこうとするならば、DLP による死亡数の増加を埋め合わせるため、その分狩猟の機会を減らさなければなりません。キーナイ半島では既にも実施されています。

*トム・スミス、合衆国地理調査所アラスカ生物科学センター。アンカレッジ、アラスカ。

狩猟者のための安全の秘訣

統計学的に、(クマ撃ちに限らず)狩猟者がクマと対峙する可能性は最も高いといってもよいでしょう。狩猟者とクマとの遭遇では、クマが殺されるか、そうでなければ狩猟者が殺されたり怪我をしたりする結果に終わることがあります。いくつかの簡単な予防措置をとることによって、これらの事故は回避することができます。

猟に出る前にクマについて学習しましょう

クマの行動の基本を知っておくことによって、狩猟がより楽しいものになりますし、獲物の肉を守り、更に自分の命をも救うことができるかもしれません。

周囲を警戒してください

あなたの周囲の状況を把握するために、感覚を総動員しましょう。藪が茂っているところを除けば、クマはそう見えにくいものではありません。新しい足跡や、糞、そして明らかにクマが食事や休息を取っていきそうな場所には気をつけましょう。クマの通り道の上では注意しましょう。獲物に忍び寄っているときは警戒しましょう。そして鳥の行動にも注目しましょう。エサをあさっているカササギ、カケス、ワタリガラス、カモメやワシがいることは、クマが食事中であることを示すことがよくあります。

仲間と共に狩猟を行いましょう

2人の方がクマを発見しやすく、クマにとっても1人であるより2人の方が発見しやすいでしょう。2人の方が1人に比べてクマを避けるのに有利ですし、一般的に仲間と一緒に行動することは、より安全です。

もしクマを目撃したり、出会ったりしたら…どこか別の場所に移動しましょう

クマはそのうち移動して、あなたはもとの場所に戻って来ることができるでしょう。



シカやヘラジカ、肉食動物の鳴きまねを使うときは最大限の注意を払いましょう

あなたはクマを誘引してしまうかもしれません。このようなときは、仲間と背中合わせに座りましょう。そして、クマが来てしまった場合どうするか計画を立てておきます。

夜間、肉を野外に放置すると、クマを誘引します

できるならば、夕暮れに獲物を捕ることは避けましょう。解体して肉を安全な場所に運ぶための十分な時間を、暗くなるまでに確保しましょう。

殺した獲物には注意して近づいてください

十分な音をたてて、可能なら風を背に受けて近づきましょう。獲物からずっと目を離さないように。

解体した肉は、捕獲した場所と残滓置き場から少なくとも 100 ヤード (91m) は離しましょう

この習慣によって、クマに肉よりも残滓（肉や皮を取った残骸）を食べる機会を与えることになり、あなたはより安全に帰路につくことができます。残滓置き場には自然分解するものを使って標識をつけ、どこにあるか分かるようにしておきます。もし、何回か往復かするのであれば、肉を獲物袋に入れて遠いところからでも見えるように吊り下げるか置くようにし、その場所に印をつけます。そしてクマがいないことを確認できるまで、その場所には近づかないでください。肉を捕獲した場所から引きずらないようにしましょう。引きずると、匂いがついた道を作ってしまう。

クマの通り道やその近くには、絶対に肉を放置しないでください

これでは、あまりにも簡単にクマに取られてしまいます。

肉を包んで荷造りするときは騒がしく音を立てましょう

クマに、あなたの居場所と、あなたが何者かなのかを教えましょう

キャンプからは肉、毛皮、血が付いた服を遠ざけましょう

可能ならば、15 フィート (4.6m) 程の高さの木に吊り上げてしまいか、頑丈な建物の中に置いておきます。重いヘラジカの足は、キャンプ場から見える場所に、しっかりと距離を取って置いておくべきです。もし、クマが近づいてきても、たいていは食べる前にその気が失せることになります。

もしクマがあなたの獲物を奪おうとしても、追い払ってはいけません

恐らく肉は台無しになっているでしょうし、狩猟の獲物を取り戻すためにクマを殺すことは、規則で禁じられています。

クマに配慮しましょう

もしあなたが、クマがいるところで狩猟を行うのならば、できるだけクマを保護するという倫理的な責任があります。また、あなたには、自分の安全と他の狩猟者の安全に対する責任があります。

威嚇射撃

威嚇射撃を当てにしているはいけません。ほとんどの場合は効果がありません。クマは、たいていそれを無視します。最悪の場合、狩猟者が威嚇射撃によってクマを追い払おうとしたときに、運悪くクマに怪我をさせ手負いの状態にしてしまうことがあります。